



おわりに

こんにちは、滝沢敦です。

子供の頃から憧れていた「魔法」。

もちろんそれは物語やゲームの中だけの話であり、そんなものは現実に「ない」ことは分かっていたのですが、根拠もなく「あると言えるんじゃないか？」という漠然とした感覚はずっと心のどこかに残っていました。あったら凄く面白いじゃないか、という気持ちと、これまで人生の中で何度かあった「魔法のような体験」がその根本にあった気がします。

大学に入学した私は、不思議な世界への興味から奇術研究会に入ります。数少ない「魔法のような体験」の1つが、そこである先輩に見せられた手品でした。飲み会の帰りに地下鉄の中で、彼女は手に握った赤いハンカチを忽然と消してみせたのです。両手のどこにもハンカチはない。袖もない状態。奇術研の先輩がやることですから、それがタネのある手品だということはわかっています。でもまったく頭がついていかなかった。本当に魔法としか思えなかったのです。手品ということはわかっている、しかし魔法としか思えない。自分がそんな理屈に合わない状態になるというのが、とてもショッキングな体験でした。漠然と魔法に憧れているだけだったのに、もしかしてこんな奇跡の秘密を実際に知ることができるのか！？ この僕にもできるようになるのか！？ という興奮はよく覚えています。

現実はもちろん現実。しかし、別の世界を垣間見る体験は現にある、作り出せる。これが本物の魔法は現実に引き寄せられそうだと、という考えのきっかけでした。(ちなみに今にして思えばこの手品は株式会社テンヨーの「ハンカチーフマジック」というもので、Amazon.com などでも非常に安価で入手できるものです。初歩的なトリックですが、本文にあるように「最も重要なのはトリックではない」のであり、トリック自体は単純でも一生記憶に残る強烈な体験は生み出し得るのです)。

その後、私は趣味が高じてリアライズ・ユア・マジックという会社を作ります。手品専門の翻訳(レクチャーDVD、関連書籍、イベントでの通訳など)を行なうところです。社名に「マジック」と入っており、これはもちろん手品のマジックではあるのですが、名前を付けた当初から私の中では本書で書いたような魔法の意味を込めていました。表向きの意味は分かりやすく「あなたが理想とする手品を現実化させるお手伝い」としましたが、実際には「あなたの中にある本当の魔法に気付いてもらい、それを実現させるお手伝い」であったのです。

大学時代、私は魔法と手品の繋がりについて短いコラムを書きました。それがこの本の前身になった文章です。特に反響もなかったその内容を面白いと言ってくれたのが、奇術研究会の先輩であった共著者の坪谷さんでした。彼とはそれ以来、魔法を含め様々な話をしてきました。私が会社を始めようとしたときにまず取りかかったのは目的と理念を決め、それを体現する「リアライズ・ユア・マジック」という社名を考えたことでしたが、

そのときに私の考え方を支えてくれたのもツボさんです。これまでの20年でそうであったように、今回も彼は私の漠然とした感覚とまとまりきらない考えを冷静に整理し、切り分け、人前に出せる形にしてくれました。

結果、この本はリアライズ・ユア・マジックの根幹を手品とは別の形で示す理念書になってくれたと思います。私が魔法の意義を見失っていたときに「お前が言っていたのはこういうことじゃなかったか?」「いや魔法はあるんだろ?」と本道に立ち返らせてくれたツボさんと、本書を共に作るという約束を果たせたことを本当に嬉しく思います。

本書を書き上げた熱海の旅館で、忘我の心持ちで共に入った露天風呂の心地よさを思い出しながら。

滝沢 敦

2019年12月17日

お疲れ様です。坪谷です (^ ^)b

少し長くなりますが、この『本物の魔法』という本がどうやって書かれたのか、その経緯をお話させてください。「約束」という名の魔法についての話です。

それは20年前のことでした。

1999年12月17日。僕は滋賀県南草津駅前の居酒屋八剣伝でいつものように仲間たちと酒を酌み交わしていました。大学のマジック(手品)サークルでステージショーを創る面白さにどっぷりハマり、夢中になるあまり大学を留年してしまった愚かな5年生、それが当時の僕(23歳)です。

アサヒスーパードライが次々と飲み干され、銀色ラベルのビンが転がっていく様子を見て「この幸せな日々が永遠に続けば良いのに」と僕は思っていました。ちゃんと就職しなければならないのはわかっています。だけど、どうしてもこの仲間たちと別れたくなかったのです。僕は叫びました。

「10年後に、すごいことしようぜ！」

またこの仲間たちと集って、何かをともに創る！ それはとても素敵なアイデアに思えました。

「いいですね！やりましょう」

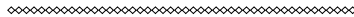
その投げかけに真っ先に応えてくれたのが滝沢でした。彼はいつも「魔法は本当にある」と主張する変な奴です。

この日僕たちは「約束」をしました。

「10年後に必ずやろう！」

その頃は2009年か。遠い未来だ。僕はもう33歳。ちゃんと就職して働いているだろうか、結婚して子供ができたりしているのかな…。

急にそこからの時間が色づいて輝きはじめました。そう、僕たちは約束という魔法にかかったのです。



そして10年が経ちました。

2009年12月27日（33歳）。僕と滝沢は300人のホールでマジックショーを行いました。集ったマジシャンは10年前の仲間6人。もう全員がそれぞれ仕事をしている社会人だというのに、どこにそんな時間と熱量があったのか…凄まじい創り込みのステージショーになりました。

僕は「人事コンサルタント」になっていました（就職できて本当に良かった）。仕事仲間に「魔法」の話をするとうるさかれますが、「人間の可能性をひらく」という意味で魔法と人事コンサルタントの「中身」はまったく同じものでした。

僕の使う魔法は『指し示すこと』。そのマジックショーの中では、魔法の杖（ウォンド）を使ってコンサルタントが経営者の悩みを共に考え指し示すことで解決する、という一幕を寸劇と奇術を組み合わせて演じました。毎日仕事でやっていることを舞台上で表現したのです。

一方、滝沢はズバリ『本物の魔法』と名打った正統派の古典マジックを行いました。髭面にタキシード姿の彼の手から、鳩があらわれ、羽ばたいたその瞬間、会場中が魔法にかかりました。

すべてをやり切ったカーテンコール。「パパかっこいい！」と客席からあがる僕の娘の黄色い声援を背に、舞台の真ん中で、僕と滝沢は握手しました。

「10年の約束、果たせたな！」

「とうとう、やりましたね！」

そして僕たちは再び「約束」をしました。

「じゃあ次は、もう10年後だな」

10年後には43歳。すっかり中年じゃないか。一体どうなってるんだろう…。約束は必ず果たされるはずです。そうやってまた時間が輝きはじめたのでした。



再び10年が経ちました。

2019年12月14日（43歳）。私と滝沢は、熱海の旅館で一冊の本を執筆していました。タイトルは『本物の魔法』。これまで2人で延々と議論し組み立ててきたこの概念を、今回は本として書き残すことにしたのです。

「ツボさん。本物の魔法は、あるんですよ。インチキとかトリックとか言われてしまうけど、そうじゃない。リアライズ・ユア・マジックですよ！」

「わかってるよ滝沢。お前のその意志を形にしよう」

最後は作家のように温泉宿でカンヅメになって仕上げることまでが作戦のうちでした。役割分担としては、滝沢は憧れ志し悩んで唸って奇声をあげる、私は理解し考え整え判断して指し示す。拡散と収束を体現した地獄のコンビネーションです。

この本に登場するカエルくんは、私の別の著作『人材マネジメントの壺』シリーズに出てくる我が相棒（分身）です。今回は出張してきてくれました（イラストの荒井さん、いつもありがとうございます）。結果的に、当書の執筆は私の中のカエルがなぜ生まれたのかを再発見する旅となり「カエルくん誕生秘話」のような形になりました。書き始めたときは想像もしていなかったことです。

原稿は無事に完成し、私と滝沢はビールを酌み交わしました。

「これまでの、10年に！」

そのビールの銘柄をふと見ると、それは銀色ラベルのアサヒスーパードライでした。「この幸せな日々が永遠に続けば良いのに」と願った20年前の私の夢は、もう叶っているのかもしれない。

「これからの、10年に！」

さて次は2029年、53歳。どんな未来が待っているのでしょうか。「約束」という魔法がまた私たちを動かしていきます。

熱海で見上げた夜空には、大きな緋色の満月がぼっかりと浮かんでいました。

「本物の魔法は、あるよ」

私がお伝えしたいことは以上です。

坪谷 邦生
2019年12月17日